

→「赤い靴履いてみたかったの」／有吉佐和子と南方熊楠

2023年7月9日(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第582回 参加報告

恩田さんのご著書『落語×文学—作家寄席集め』は、産経新聞に掲載された後、大阪府保険医新聞に続き今なお連載中の文章をまとめられている。目次には多岐にわたる分野の方々のお名前があり、落語とのつながりについて実に詳しく書かれている。それぞれの作家たちの数多くの著作を読まれているということで、その膨大な読書量と記憶力に敬服した次第である。その中に「知の巨人」と言われた南方熊楠の名もあり、粘菌類に生物研究をはじめ民俗学、人類学など幅広い分野で業績を残した世界的な博物学者が若いころ、寄席に足しげく通り落語にも通曉していたらしく、知らない一面を見た思いがした。恩田さんのお話の後、図書館を見学し、2階に設けられている「有吉佐和子文庫」を訪れた。娘の有吉玉青さんの寄贈された本が並び、著作の他に複合汚染を書く際の資料本などが置かれていた。又、一階の蔦屋書店にも有吉佐和子コーナーがあり、横井さんのお薦めもあり、1回の蔦屋書店で2020年に復刊された「非色」を購入した。



「紀ノ川」(新潮文庫)



「非色」(河出文庫)

『紀ノ川』を書いた5年後に有吉は28才でニューヨークに留学している。その時に感じたあらゆる場面での白人とカラーード(有色人種)の人種差別。17年ぶりに再版された本の内容は今、小説として読んでも面白く一気に読み終えた。戦後すぐの絶望的な食糧難の中で、生きていくために軍関係の施設で働く人も多くいた。中には占領軍の軍人と結婚し、太平洋を越えて夫の母国に渡った女性は「戦争花嫁」(ウォーブライド)と呼ばれ、その数は4万人とも5万人とも言われているが正確な記録はない。

「非色」の主人公の笑子もその一人で、黒人兵と正式に国際結婚して日本で豊かな生活を手に入れるが、生まれてきた子供の肌の色が黒いことから世間の好奇の目にさらされ、肉親との軋轢に苦悩し、夫の住むアメリカに渡る決心をする。しかし、アメリカでも過酷な現実は変わらず、生活難とアメリカ社会にひそむ人種差別は歴然と存在し、その上、黒人たちが住むハーレムの中にも差別はあり、プエルトリコ人を下に見る風潮があることを知る。しかし物語の中の救いは、笑子が明るく合理的な考えの持ち主で、冷静な観察眼をもち、明日への希望を失わないことだ。1964年に発表された『非色』がいかに先駆的で稀有な作品だったか今更に実感した。

『紀ノ川』の最終部で「流れがとまっているような紀の川は翡翠と青磁を練り合したような深い色あいをして横たわっている」「河口近くは住友化学の大工場の林立する煙突がえんえんと立ち並んでいる」としめくくられているのだ。有吉は1975年から朝日新聞に複合汚染を連載している。このころから有吉は将来、起こるであろう環境問題に関心を持ちつつあったようである。他にも老人介護について扱った『恍惚の人』はベストセラーにもなり社会的に問題提起している。作品の多くが映像化、舞台化され海外での評価も高い。現代劇をはじめ文楽・歌舞伎の脚本、演出でも活躍。しかし53才で急逝している。



世界一統酒造(南方熊楠案内板)

図書館近くには南方熊楠の生家である、世界一統酒造会社が現在もあり、生家跡の一角に胸像が据えられている。その後、開館一周年をむかえた有吉佐和子記念館を訪れた。東京杉並の自宅を再現したもので二階には茶室もある。恩田さんのお話しによると偶数月にはこちらで読書会も開かれているそうで盛況のようだ。

その後、「神武天皇御聖蹟男水門顕彰碑」が建つ水門吹上神社、作家・黒岩重吾を弔い黒岩家の

墓がある海善寺、西岸寺の板碑をへて和歌山城を望む汀公園に到着。

7月9日は第二次世界大戦の時に和歌山大空襲があった日で、汀公園では13時から始まった慰霊祭の式典が続いて読経が流れていた。園内に戦災殉難供養塔があり観音像に礼拝する人も多くみうけられた。

帰りの南海電車の中では、同行者の方から「これが紀の川ですよ」の声に窓の外をながめると、想像よりはるかに川幅もある雄大な流れで、今回あらためて読みかえした母娘三代を描いた『紀ノ川』の内容に思いをはせた。

<田原由美子>



海善寺(黒岩重吾の墓所)



有吉佐和子記念館